

久留米城 今昔

産婦人科学講座 牛嶋 公生

久留米大学旭町キャンパスの3階以上の高さからはほぼどこからでも久留米城（通称篠山城）の石垣が見える。毎日何気なく見ている景色であるが、その歴史は古く本格的築城からも400年以上が経過している。このタイトルは自身の小学5年生の夏休み自由研究のタイトルである。医学図書館ニュースにはそぐわないが、内容は問わないということなので学童のころから城フェチで怪獣図鑑とともに日本の城の本を持ち歩いていた手前、ご容赦願いたい。

肥前との国境に近いこの場所に居を構えるのは珍しいが、城の北西を流れる筑後川を天然の要害として、古くは室町時代にその原型は築かれていたらしい。本格的城郭として整備されたのは、1587年（天正15年）秀吉の九州平定により小早川隆景が筑前に入り、同時に毛利元就の九男 毛利秀包（ひでかね）が久留米に来てからのことである。小早川家に養子として入り、この時期小早川秀包と称していた。この人物あまり知られていないが、秀吉の朝鮮出兵（文禄慶長の役）において碧蹄館の戦いなどで猛者の誉れ高い柳川の立花宗茂らとともに武功を上げているが、関ヶ原で西軍についたため改易となった。なお正室はキリシタン大名としても有名な大友宗麟の娘であり、本丸内にクロス文様が入った祠が小早川神社として残っている。

さて、その後丹波福知山より有馬豊氏が転封となり21万石の大名にふさわしい居城として現在の形に整備された。天守閣はないが、東南（巽）の三層櫓が天守としての役目を担っており（丸亀城、高知城などより大きい）、本丸の8つの櫓を二層の櫓塀が結んでいる（多聞造）珍しい構造となっていた。建造物は市内の日輪時に移築された乾門を除いて残っていないが、高さ15メートルの高石垣はほぼ残っている。一部に布積み（天下普請以外では珍しい）を含む打込み接（はぎ）の立派なものであり、石垣に挟まれた土部分に塀のあとが窺える。二の丸部分がBSの駐車場の部分、三の丸が工場付近で市役所のあたりまでが城内だったようである。本丸内の有馬記念館にもいろいろと資料があり、また敷地内に明治以降の様々な郷土の偉人を顕彰する石碑があり定期的に訪れてもその都度発見がある。

久留米藩は幕末において藩論が混乱し討幕に参加できず、明治維新以後雄藩とはならなかったが、久留米21万石は江戸時代そこそこの大大名であった。その歴史的な史跡の一部に我々は日々生活しているのである。旭町キャンパスが一望できる石垣の上に登ってみて、過去の風景を想像し、歴史に思いを馳せるのも一興ではないでしょうか。